

文章題テスト・小説(3)

月 日
名 前

★ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある日、彼は友だちからジュウシマツという小鳥を二羽ふたわもらって来た。もともと、昆虫こんちゅうであれ、犬であれ、ねこであれ、動物ならなんでも好きなたちだった。

「飼かっていいだろう。」と彼は母親に言った。

母はちょっとムズカしい顔をした。

「そりゃ…飼かってもいいよ。ただしサブが自分でちゃんと世話するんならね。」

彼は三郎さぶろうという名前なのだ。ひとりしかいないのに三郎というのは、きっと二人の兄が死んでしまったのにちがいない。病気でか、それとも戦争でか…。

「もちろん、ぼく、自分でみんなやるよ。」

そして金網かなあみ張りの箱を作ったり、えさにするあわを買って来たりした。なに、みんな安いものだ。彼はジュウシマツを箱の中に放し、その飛び回る様子を長いこと観察くわんさつしていた。

「これでよし。」彼は言った。

さて、夜おそく父親が帰って来た。少年はぐっすりねむっていた。父親は腹はらが減へっているので、だまってテーブルのおおいをはがし、飯を食べた。四杯はっぴも食べた。それからお茶を飲む段たんどりになって、初はじめて、へやのすみに見たこともない箱がふろしきをかぶって、

置いてあるのに気がついた。

「あれはなんだ。」父親が言った。

「ジュウシマツ。」母親が説明した。「三郎がもらって来たんです。」

3 父親の顔はふきげんになった。

「おれは不賛成ふさんせいだ。」

「だって、えさなんて安いものだよ。」

「金かねのことじゃないんだ、動物はおれも好きさ。だが、小鳥をかごに入れて飼かうなんてのは、性しょうに合わないんだ。」



母親はベンゴした。

「でもね、自分ですっかり世話するって言うし、あの子はこんなことが好きだから…。」

父親は母の顔を見、箱を見、それからねている三郎の顔を見てから言った。

「よし、わかった。」

翌朝、少年が目をサました時、父親はもう出かけるところだった。

「おい。」父親はくつをはきながらふり向いた。「ジュウシマツを箱からにがしてやれ。」

少年はふろしきを取りはらって、箱の中をのぞいていた。

「お父さんは何も知らないんだなあ。」

「そうか。」

父親は弁当を持って、さっさと出かけて行った。

日曜日が来た。少年も父親も、ふたりとも家にいた。少年はジュウシマツの世話をしていた。

父親は新聞を読んでいた。少年は箱の入口のとびらから手を入れて、水を取りかえていた。

その時、ちよっとしたすきに、一羽のジュウシマツが箱から飛び出した。

「たいへんだ。」

少年はすぐ追いかけて、えんがわから飛び降りたが、その時上空から何かがさつと降り

て来て、ジュウシマツをさらって行った。モズだった。父親も出て来て、ふたりであとを

追ったが、もう影も形も見えなかった。ふたりは並んで家へ帰って来た。父親が言った。

「箱の中にかすめない鳥なんて、もう飼うのはよしたほうがいいな。」

少年はだまっていた。父親というものは、なんて心配性なものだろうと思って。

(長谷川 四郎「少年」より)

(注) ジュウシマツ——親鳥はふつう十二〜三センチメートルぐらいで、白色や赤褐色のまだらのものもある。よく子がふえる。

モズ——中形の小鳥。頭や背は赤褐色、腹面は白い。虫やカエルなどの小動物をとらえて食べる。



